



ボディパーツは、ストンピンアークのフロント リップと北米仕様のSグリルの装着のみ。



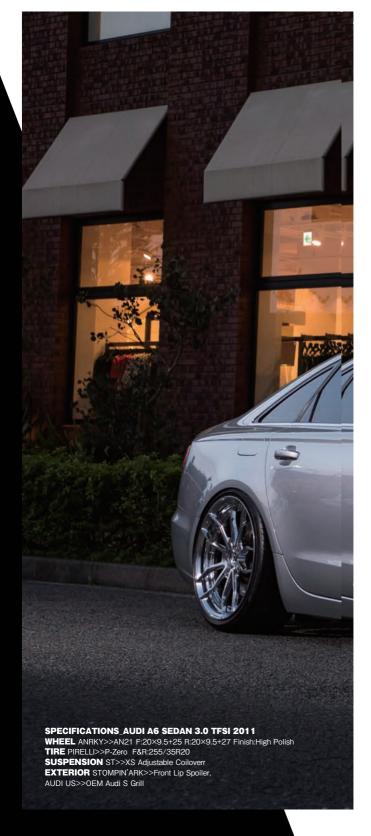
メインは カーオーディオだが、 ユーロモディファイも 大好物!

ユーロ業界で、今もっとも話題の人物がアプローズの斉藤綾之介代表。これまでのボンドショップやアクセスエボリューションなど、輸入車ショップでの経験を活かして4年前に独立。その時代に得たオイールコーディネートや足回りのセッティングのノウハウは、今やミリ単位のこだわりへと遠している。若さゆえの研ぎ澄まされた美意識は注目に値する。

400 A6 3.0 TESI

(Builder) APPLAUSE

CALL>>APPLAUSE (アプローズ) TEL:03-3330-2355 applause-audio.com PHOTO>>AKIO HIRANO (平野 陽) TEXT>>eS4 (編集部)



ツメツメのキワキワというミリ単位でセッティングされた足元のスゴさ

アプローズはカスタムオーディオのメイキングを得意分野とする新進のショップだ。しかし代表の斉藤綾之介さんは、ボンドショップやアクセスエボリューションなどユーロの有名ショップで経験を積み、現在でも諸先輩方と協力関係をもち続けている。そういう背景もあることから、ホイールやサスセッティングに関して並々ならぬこだわりを持つ。このクルマに装着するアナーキーは、アメ鍛ホイールのなかでも最高峰の品質とプライスを誇る宝石のような存在。このホイールをセレクトした瞬間にやるべきことはひとつ、いかに美しく誇らしげにインストールするかということ。これまで多くのホイールを販売、セッティングしてきた斉藤サンにとって、まさに腕の見せどトろ。まず、このA6はアッパーミドルのEセグメント

だけに、ホイールサイズは21や22インチあたりで、イバリを利かせるというのがこれまでの流儀。しかーセレクトサイズはあえての20インチ。これはロワードとインセットをギリギリまで詰めたことと、腰高感の解消とフェンダーとのクリアランスやなく、キワキワの位置にセッティングされているのが分かる。「この状態でも干渉する分部はないし、ハンドルも全切り可能です。欲を言えばもう少しタイヤを立ち気味のセットにしたいのですが、このカリスペンションは構造上ノーマルでは、このカリが限界。アームで補正すれば完璧になります。それ、オフセットもあと数ミリは外側に出したかった。まだ煮詰める余地はあります」と、このキワキワの攻

めのインストールでも余地があるというのだから恐るべし! ホイールを美し魅せるためのこだわりが半端ではないのだ。普通ならここまで下げて、ギリギリのクリアランスに設定するなら、エアサスを組むというのが定石なはず。あえての生足というのも斉藤サンのスゴさというか、若さゆえのチャレンジといったところだろう。

なお、外装は先輩ビルダーたちをリスペクトしたサラリ系とした(斉藤サンがいうところの)、フロントにストンピンアークのカーボンリップとUSグリルを装着したのみだ。しかし、この存在感の演出は、ホイールの魅力を徹底してアピールするするためのもので、みごとに成功したといって間違いな。侮れない新世代ビルダーの仕事ぶりだ。









●フェンダーがややタイヤに被っているような雰囲気があるが、これは影か出てそのように見えてしまっている。インセットは+25とギリの設定としているが、どこにも干渉していない。シルバーのボディにポリッシュの輝きをコーディネートしたのは新鮮。 ②オーナーは当初ブラッシュドフィニッシュを望んでいたが、それでは普通過ぎるということで輝きのあるハイポリッシュとしたことが、センスアップにつながっている。 ③タイヤとフェンダーエッジ間は極小のクリアランスがあるのみ。アプローズの斉藤サンは、あと数ミリは詰められたと悔しがる。